

# ジャングルに消えた兵団

(当時の転進部隊配置図)



当時、筆者はサンダカンよりゼッセルトン(アビ)へ転進した、独立機関銃第20大隊第2機関銃中隊に所属していた。

## キナバルの東・目次

発端.....	七
サンダカンを発つ.....	一三
ヘルランまで帰る.....	四
ラブク河を遡る.....	七五
ポトオまで.....	一〇四
ラナウの高原.....	一三七
キナバルへの道.....	一八三
タンブローリに憩う.....	二〇七
献詞——一つの墓碑銘——.....	三三〇

「キナバル山」と私……………藤波健彰……………三三  
あとかぎ……………三九

キナバルの東  
——サンダカン死の行進——

いる。

今回、私の制作した記録映画「キナバル山」の公開が機縁となり、そのサンダカン死の行軍の記録「キナバルの東」の存在をはじめ知り、出版に協力して私の写真の提供を求められたのを機に、この解説文をしるしてみたのである。

一九七三年五月

〔筆者は「キナバル山」の撮影制作者〕

## あとがき

ことしの三月、幻の記録映画といわれていた「キナバル山」をみせてもらった。私にとって、この「キナバル」という地名は忘れることのできない因縁の地である。

当日、映写会場である国立近代美術館で、私はこの映画の制作者である藤波さんにお会いした。そのときキナバル山のスチール写真があったらみせて欲しいとおねがいをした。理由は、私にも「キナバルの東」と題する当時の記録があること、そしてそれにまつわる恩讐めいた執着のようなものがあったからである。

後刻、私は「キナバルの東」の前半をコピーして藤波さんに送りみてもらった。折りかえし藤波さんから、これまで活字になったボルネオ関係の記録を指摘され、「サンダカン死の行進」に関する部分が、全く欠落しているので、是非、本にしてみましたらどうか、とすすめてくれた。

私は藤波さんの三十数年も前にとった稀少なキナバル山の写真をみて、その気になったのである。いわば藤波さんが撮影されたその写真に触発されて、わすれかけていた二十八年も昔のふるい記録を引っ張り出すことになった。

私のこの記録は昭和二十五年に、作家の故中山義秀氏が、朝日新聞の小説「七色の花」の一挿話として、すでに使用されている。「遠征」「敗軍」という二章がそれで、今回、これも数十年ぶりで中山氏の小説をよんでみたところ、私はすっかり忘れてしまっていたが、一側面ながらボルネオ戦の概況が描かれており、私の「キナバルの東」は、その「遠征」という一章にあたる挿話となっている。

つまりラヴァン島に上陸してきた敵をポーホートの戦線で迎え、以後、じりじりと後退して辛うじて六十三哩地点にふみとどまり、そこで終戦を迎え、日本の無条件降伏による投降から、オーストラリア軍の収容所生活、復員という一連のコースについては、別に私は「覚え書」のメモを提供し、中山氏はそれによって次章の「敗軍」の章をかいたわけだ。記録的にみても事実が正確に扱われているので機会があったら御参照ねがいたいとおもう。

☆中山義秀全集・第五巻「七色の花」五一四―五三九頁「遠征」「敗軍」の章（昭和四十七年刊・新潮社版）

さて二十八年も前の日記を引っぱり出してはみたものの、現在の私にとつては、なにかもすっかり忘れてしまっているし、正直なところ呆然自失というところである。

しかし、ことが事実の記録である以上、今となつては手ほどきしようもないので、目をつぶって全部そのまましておいた。しかし、せめて迎った地名だけでも再確認しようと、藤波さんが所蔵している当時の、英國製大判地図を迎ってみたが、ヘルランとか、サビ、ポトオ、タンベアス、ラナウ、ブント・トアンカウンといった主要拠点にあたる地名のほかは、全く手がかりがつかめず、藤波さんの意見も入れて、結局

その中間の地名の記載も全部、当時のままにしておいた。日本語で呼称された発音が現在とちがっていることも予め御諒承ねがいたいとおもう。

また登場してくる人名についても、仮名を使ったり、頭文字の記号、あるいは実名をそのまま使った場合もあり、失礼の点多々予想されるが、あの異常な極限状態における人間の行動であつてみれば、もはやそれをとやかく批判すべきではないし、それに二十八年というときが流れて、すでに時効になっている、という判断のもとにおゆるしねがう外はない。

また一方では、ふた昔も以前の日記を今更という気持もあるが、少し大げさにいえば、この記録は私自身をも含めた、当時の世代が負わされた歴史の一章となるわけで、これを否定しては私自身の今日もまた存在しなかつたことになる。私は自分の「墓碑銘」のつもりでこれを出版することにした。

\*

この「キナバルの東」の出版が進行している、ごく最近、書店の棚で橋本広氏が書かれた「北ボルネオの山旅」という本が目にとまり、一読したが、かつて私たちが生命を危機にさらしながら眺めたキナバル山と、その周辺のことを現在の登山家の体験をとおしく描かれており、感慨無量だった。

たとえば当時のゼッセルトン（アピ）は、コタキナバルと改称され、現在は首都であり、写真によると近代的高層ビルが建ちならび、また、かつての首都サンダカンの港街も超モダンなビルがそそり立っている。

それよりも二十八年前のあるとき、私たちが重い死を背負いながら彷徨した、あのキナバル山麓には登山

者のためにジュラルミン製の山小屋やヒュッテが点綴し、三千メートル以上の登山道では、登ってゆくもの、下山して来るもの、いくつかのパーティが行き交いの挨拶をかわしているという有様は、まさに今日流に云えば「キナバル銀座」の観を呈しているようである。

いちど体感した人間の精神風土のなかで、その苦渋にみちた印象は容易に消し難いが、三十年という歲月のもつときの流れの恢復力は、なんと素晴らしいもの哉とおもう。もはやキナバルは現在の私が考えているような悲傷の地ではないのである。

ともあれ私はこの本を、当時、あのキナバル山麓をともに辿った三人の同行者、就中、あの災厄のために犠牲となられた多くの兵士たちに献じたいとおもう。

キナバルの写真とともに藤波さんに「キナバル山と私」の跋文をよせてもらった。藤波さんは熱心なボルネオ会の常任理事さんで、今回の出版にあたっていろいろな御教示をいただいた。もし藤波さんとの出会いがなかったなら、この本は日のめをみなかつたであろう。

また旧知である金剛出版の淵上祐史氏が採算を度外視して本書の出版をひきうけて下さったことなどを、一つのサイクルとしてつなぎ合わせてみると、この本の誕生にはなにか別のところでの、ある意志がはたらいていたような気もしないではない。

一九七三年六月

著者

検印廃止

### キナバルの東

定価 1,500 円

©1973

昭和48年7月10日 印刷

昭和48年7月15日 発行

著者 松本國雄

発行者 淵上祐史

印刷・高野印刷

製本・河上製本

発行所 株式会社 金剛出版

東京都文京区水道1-5-16  
升本ビル2階 (〒112)  
振替 東京 34848  
電話 (03) 815-6415 (代)

0095-731006-2354

### 著者略歴

1917年宮城県生。早大政経。日中戦争(1938)及び太平洋戦争(1944)の二回にわたり召集。編集・出版の仕事を経て現在に至る。主なる著書・陣中手記「幾山河」(1940)、「慰霊祭」(1941)、「果立ち」(1943)。その他、釣り関係の著書など。  
現住所・神奈川県鎌倉市腰越 5-12-8